

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT

夜船活
全

武
779

3 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

武藏 779

大正七年九月廿日
高田早苗氏贈

南無 寺田 藏書

夜船閑話

山形初め冬學の日誓川て勇徳の信心を
憤發し不退の道情を激起し精錬刻苦
を内者既小友之親友一に夜忽然として
落第を従弟多女の疑感根より和して氷
融し曠劫生死の業根底を徹して垢穢を
自ら翹く道中人を去る身定に遠くは
古人三二十年是等の程怪そと悦躍舞公



友公問古

忘る者数日向後日用と廻顧する不効神の
 二境全く調和せし去勢乃支逸総り脱洒
 あらび自ら謂らる極く精彩と着る重て
 一回捨命し去ん中縛ひて牙突と咬定し
 雙眼晴と瞪眸し寢食とも小瘥せんとも
 既にして未だ期月小耳さるる心火逆上
 肺金焦枯して雙脚氷若の底不浸とらぬ
 く支耳漢智のるんぬらぬ肝膽亦不

怯弱小し七葉措恐怖多く心神困倦し寐
 寢種々の境界から見れば支腋亦汗公生し
 支眼亦に涙と帯ふ世小おいて遍く明解し
 授し廣く名醫を採ると云へども百薬す
 功なし或人曰く城の白河乃山裏に巖居
 する者あり世人是を名あて白歯先生と
 之を靈壽之に甲子を以て一人居之に星
 程を隔は人と見れば支公好はまどゆく則は

必まをて避く人そ賢愚を辨どるるのたよ
 聖人專し稱し七仙人とて以て故の丈山氏
 の師範しして精く天文に通じ深く醫道
 不達と人あり稱せりし七塔即ち別々
 是に微言を吐く退ひて是を考ふよ大いに
 人不利ありしとけ小おわく壺永第7 庚寅
 孟正中浣竊し小行纏ひ着け濃東の發し
 愚谷の紙直ち小白川の邑に到り包を茶

店小おれし七出り巖栖のまよをゆるぬ里人遙く
 一校の溪水の指と仰ち彼の水を夢にほて
 遙くに山溪小入内正よ行く夏里をうろよ小作
 ち流あふ踏断と推往もほさるし時り一
 きまあり遙く不雲煙のるん指と黄白あり
 て方寸餘るる者ありし山氣にほて或は
 或は隠るる是函の洞は小壑下とる所の蘆簾
 ありと不仰ち裳を裏けて上は巖出巖の縮

み蒙茸と披け氷雪草鞋と咬と雲露衲
 衣と履と辛汗と滴し苦膏を流して漸く
 彼の甚るるのまに到るは風致法徒美にお
 後に丁こころのを噴く心魂震し忍と肌
 膚刺寒の具く巖根に倚て教息する
 者救百少舌わめて衣を振ひ襟を正しく
 畏はく鞠躬して養子の中をわの朦朧
 として幽る目と収めて端をさるる蒼髮

垂て膝に到り朱顔靡くして棗のぬり大布
 乃袍を掛け輭草の席に坐せり窟中後らに
 方入る笏ふして今く資はれ具を一机上
 只中庸と老子と金剛般若とを置くと予
 則ち禮と盡して苦ろふ病因を告げ且の救
 ひを請ふお舌幽眼を穿ひて熟く視て律と
 として告げて曰く痴は是の中を死の陳人
 檀栗を拾く食ひ糜糜に付はく睡はけ

外更に何れも知らんや月も愧に遠く上人の
 来やん骨より交と不刃ら轉々答叩し
 休すの時ふ歯括めしして予がよふ投しして精
 しく五内と窺ひ九候と察と凡甲長ことす
 す惨平しして類と攢めはあて云く己哉觀理
 度小過と進修糸が失しして終小世の重症な
 發と美に醫治し難た者ハ公の禪病あり
 若し鍼灸藥の二ツ乃おん持んで而して後

に是と救えんと欲せば扁倉力と流く一華陀
 類と攢むるも奇功と見侍交能へド今既
 小觀理のお小破ら侍勤めて内觀の功と積ま
 どんば終に起は交能へド是故の起倒は必
 らば地に依るの謂より予が曰く預くと内
 觀の要秘と交うん學まびごてし不足と修せん
 出束とめしして容かあしつゝの從容しして
 若て曰く嗚呼このめきは同なるやと好む乃士

さり疾こが昔むか一ひと回まけるまを以もて微すこく公こうり
 告つんり是こゝ卷まの秘ひ訣けつ不ふして人ひとの知しる事こと稀まれ
 是こゝより急いそぐままんん必かなず奇き功こうを具もつ久く視しも又
 期こしはへ一ひと丈ぢやう大だい道だう分ぶんままくく支し儀ぎあり陰いん陽やう
 交くわう和わして人ひと物もの生なれ先ま天てんの元げん氣き中ちゆう間かん不ふ動どう運うん
 して五ご臟ざう列りやうて經きやう脈まく行かうる衛ゑい氣き營えい血けつ互ごに昇しやう
 降かう循じゆん環わんままる者もの晝ちゆう夜やに大だい九く十じゆう度た肺はい金きんへ北ひつ
 蒼そう不ふして膈かく上じやうに浮うび肝かん本ほんへ牡ぶ藏ざう不ふして膈かく

下に沈しんぼむ心しん火か大だい陽やう不ふして上じやう部ぶに位ゐひし
 腎じん水すい大だい陰いんにして下か部ぶをたむむ又また膈かく不ふ七しち神しんあり
 脾ひ腎じん各かくく二に神しん八はつ藏ざうくを呼こび心しん肺はいより出でて
 吸きつ腎じん肝かんに入いる一ひと呼こぶ脈まくの行かうくを復たが三さん寸すん一ひと吸きつに
 脈まく乃すなはち行かうくを復たが三さん寸すん晝ちゆう夜やに一ひと萬まん二に千せん八はつ百ひやくの氣き
 息そくあり脈まく一ひと身しんを巡めぐ行かうするを五ご十じゆう次さい火かの輕かへい
 浮ふに志しては杯はい不ふ騰たう昇しやうを好このむ水すいの沈しん重じゆう不ふして
 常じやう不ふ下か流りゆうる務つとむ若わ人にん寢しんぬに觀くわん照しやう或あるは常じやう

と失し志念或は度にふる刻は心火熾衝し
 て肺金焦薄と金母苦しむ則ち水子衰減
 して母子互に疲傷し七五位困倦し六属凌棄
 して四大増損して各々百一乃病を生じ百藥
 功を立ざる支能いど衆醫徒に多し束縛
 て終小若るまよふに到る蓋し生かざるもの
 國はちのらぐ如し明君聖主は者不仁公下し
 小一暗君庸主は者に仁公上小次に以上

恣ふざる則ち九卿權に誇り百僚窮を恃んで若
 て民乃の窮困を顧るを交をし抑ふ菜色多く
 困餓莩多し賢良瀆み竄と臣民瞋り恨む
 諸侯離れ叛き衆夷競ひ起つて終小民度と
 塗炭に一國脈永く断絶する不到は仁公
 下に専らふざる則ち九卿位分を全し百僚初を
 勤めて者不民乃の勞疲を忘るるを農
 に餘はんの粟あり婦小餘はんの布有る群

賢^{けん}来^きり属^{ぞく}し諸^{しよ}侯^{こう}志^しを服^{ふく}して民^{たみ}肥^こ（國^{くに}強^{つよ}く
今^{いま}に遠^いき方の丞^{ちやう}民^{たみ}なく境^{さう}ひを侵^{せう}きその敵^{てん}國^{こく}
か一^{いち}國^{くに}斗^との智^ちをばくばく変^かふく民^{たみ}戈^か戰^{せん}乃^{なり}
名^なを知^しるば人身^{じんしん}も海^{うみ}を終^{しゆう}る至^し主人^{しゆじん}の常^{じやう}なり
心^{しん}氣^きかして下^{した}に充^みて一^{いち}心^{しん}氣^き下^{した}に充^みはつる
則^{すなは}ち七^{しち}凶^{きゆう}内^{ない}小^{せう}初^{しゆ}く変^かふく曰^{いは}邪^{じや}海^{うみ}と外^{がい}よりり
竊^{せう}るの結^{むす}むと管^{かん}衛^ゑ充^みち心^{しん}神^{しん}健^{けん}よりり口^{くち}
終^{しゆう}小^{せう}藥^{やく}餌^にの耳^{みみ}破^{やぶ}る知^しるば身^み終^{しゆう}に鍼^{しん}灸^{しゆ}の

痛^{いた}痺^{しび}と交^まはせど庸^{よう}流^{りゆう}は劣^{せう}に心^{しん}をたして上^{うへ}に
恣^しふと上^{うへ}に恣^しふにさる則^{すなは}ちたすの火^ひ右^{みぎ}すの金^{かね}を
尅^くして五^ご官^{くわん}縮^{ちやく}はり疲^{つか}して六^{ろく}親^{しん}苦^くうし一^{いち}み恨^{うら}む
是^{こゝ}故^{ゆゑ}に涿^{しやく}園^{えん}曰^{いは}く真^ま人の息^{いき}は是^{こゝ}と息^{いき}さるに
踵^{かかと}と以^{もつ}て一^{いち}衆^{しゆ}人の息^{いき}は是^{こゝ}に息^{いき}さる小^{せう}喉^{のど}と
以^{もつ}て以^{もつ}て許^{きよ}後^ごがましく益^{えき}一^{いち}下^{した}焦^{しやう}に在^あり則^{すなは}ち
そ息^{いき}遠^{とほ}く氣^き上^{うへ}焦^{しやう}に在^あり則^{すなは}ち
上^{うへ}陽^{やう}子^しが曰^{いは}く人に真^ま一の氣^き在^あるを丹^{たん}田^{でん}乃^{なり}中^{ちゆう}

に降下する則ち一陽は復と若人始陽初復
 の候は急むと欲せは暖氣を以て是が信と
 なる一六九の支の書みの乃上部は常より
 清涼なるん支を要し下部は常より
 らん支の要せよ又經脈の十二は支の十二に
 配し月の十二に應し時の十二に合し六多癢
 化再周して一歳を全ふとらんが如し五陰上
 小居し一陽下を以て是を地雷復と云ふ

冬に至る候より真人の息は是の息と云ふ小陰
 と以て是の謂う之陽下に位し一陰上小居し
 是と地天泰と云ふ益正の候より萬物發生
 の氣を合せて百存表化の澤と云ふ至人元
 氣を以て下小充と云ふの象人是を得は
 則ち營衛充美し氣力勇壯なり五陰下一
 居し一陽上に止はる是の地剝といふ九月
 の候より天是の得る則ち林苑色は失し百

存荒落と足象人の息は足と息とる不喉と
 以てとるの象人は息は得る則ち形容枯槁
 齒牙揺う落に所以不延壽書に云く六陽
 共に盡く則是全陰の人死し易と須らく
 知るべし元氣を以て常に下不充しむ是生
 公者入樞要なるものと昔一吳契初石臺
 先け不見い齋戒して鍊丹の術と官も先
 生の云く亦不元玄真丹の神秘あり上この

器にありとるよるんは得く得くはる古
 黄朱子足は以て黄帝に傳ふ帝は齋戒して
 足はよくす大道の外不玄丹よくまは乃外
 小大道なり蓋し五無漏の法あり你らの六欲は
 去ち五官各く其職を忘る則ち混然とる本源
 の真氣彷彿として目前に充つ是彼乃大白
 道人の謂ゆは我が天我は以て復た下の不台
 まる者なり孟軻氏の謂ゆは浩然の氣を

ひそいて脰輪氣海丹田の同小藏りて歲月は
 布を祿て是はち守一ふ一去つと是は常くを
 適小一去て一朝乍ら丹竈を掀籠する則は
 内外中る八紘四維總是一枚の大還丹は時小
 當りて初て自己存らば是天地に生て生に
 考るにほほとく死せざる底の真箇長生久
 視の大神仙なるものと覺得せん是と真正丹
 竈功成る底の時希とらば豈に風小御一霞

小踏ぐる地は縮め水を踏む等の鎖束する幻変
 心いて懐とよる者さるんや大洋を攪ひく酥
 酪と一厚土は変じて黄金とらば希賢白く丹
 は丹田あり液は肺液あり肺液をひく丹田
 還へは是故に金液還丹といふ予り白く謹ん
 で余は固い法具とく禪觀を施下し努め力
 めて治する心いて期とせん者さるんや李士戈が
 謂ゆる法降に偏する者にあはるんや

必と迅發の雷かある但一雷として澤中に
藏とえり必に飛騰の龍かある海に澤り水よ
あつばとさふ夏か一是相火上り易さふ割
とるの終にあつばや又曰く心骨燃とる則は
虚して心熱は心虚とる則は是を補とさふ不
心下志ていて賢に交は是を補とさふ既
海の道あり公先ふ心火送上して世重病は
發に若し心火降下せよんへ能ひ之界乃

秘密は行し盡しころに起り米はト具ツ又
赤ら形と模道家者流に起るとる公にて大いふ
釋に吳する者ととるは是釋か他日亦發せ
はたふふ笑はるたの夏者しむと觀は公觀は
以て正觀とるぬ觀乃其公邪觀とる向とる
公多觀とるは世重症は見は今是を救ふに
公觀とるはは可さる公若し心炎
意火を収めて丹田及び其心のるふおは胸

瞞自然に清涼にして一^ん點の計較も想なく一^ん
 滴の識浪情波おらん是^ん真觀清淨觀なるを
 云々^ん復^んかると志^んを^んく^ん禪觀^んを^ん抗^ん下^んせん^んと
 佛の言^んく^んん^ん公^ん足^んん^んふ^んお^んこ^んめて^ん能^んく^ん百^ん一^ん乃
 病^んの^ん治^んと^ん阿^ん舍^んに^ん酥^んを^ん用^んけ^んの^ん法^んあり^んん^んの
 勞^ん疲^んを^ん救^ん入^ん復^んを^ん妙^んなり^ん天^ん台^んの^ん摩^ん訶^ん止^ん觀^ん
 に^ん病^ん因^んを^ん禱^んと^んる^ん復^ん甚^んと^ん盡^んせ^んり^ん治^ん法^んを^ん説^んく^ん
 復^ん亦^ん甚^んと^ん精^ん密^んあり^ん十^ん二^ん種^んの^ん息^んあり^んと^んよく

亢病^んを^ん治^んに^ん臍^ん輪^んを^ん縁^んして^ん豆^ん子^んを^ん見^んる^ん乃^ん法^ん
 あり^んそ^ん大^ん意^ん心^ん火^んを^ん降^ん下^ん志^んて^ん丹^ん田^ん及^んび^ん足^んを^んよ
 収^んる^んん^ん以^んて^ん至^ん要^んと^んに^ん但^ん病^んを^ん治^んと^んる^んの^んよ^んふ^んわ^ん
 び^ん大^んい^んに^ん禪^ん觀^んを^ん助^んと^んく^ん蓋^ん一^ん繫^ん縁^ん禪^ん美^んの^ん
 二^ん止^んあり^ん禱^ん美^んハ^ん實^ん相^んの^ん因^ん觀^ん繫^ん縁^んは^んを^ん氣^んを^ん
 臍^ん輪^んを^ん法^ん丹^ん田^んの^んる^んに^ん収^んり^ん守^んる^んん^ん以^んて^ん第一^ん
 と^んに^ん修^ん者^ん是^んを^ん用^んる^んた^ん大^んい^んふ^ん利^んあり^ん古^んし^ん
 永^ん平^んの^ん岡^ん祖^ん師^ん大^ん宋^んに^ん入^んて^ん必^ん淨^んと^ん天^ん臺^んより

おに師一日密室に入て益々精入後曰く元
 子坐禪の時さん心方たの掌の上になくを
 是仰ら顛師の額内は繫縁止の大畧あり
 顛師初め世の繫縁内親の秘訣を教へく生
 家兄鎮懐が聖病と萬死の中に助け救ひと
 由の度々精しくは小止觀の中に説けるま
 白雲和尚曰くかつ孫に心とて臆子の中に
 充くむ徒公匡一衆公領一實公接一

横に應下乃る小糸と普祝七縦八横のる小おつく
 是公用ひて清くするまふ一老来珠に利益多と
 交公嘴を公と寔にやぶる一是益一素回一
 みゆ内恬澹虚無とま真氣是に志とく入
 精神内に守る病何と下りあむむとい入終
 に本つたの入者あむむ且つ交内に守るの
 要元氣とて一身の中に充塞せり先之百
 六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪むりも

欠缺のそまふくくくめんまふ要はこれけん
 考ふ至要なるものか知るべし彭祖白く和神
 道す氣の法當さふ深く密室に鎖ざし牀に
 案し席に暖め枕のさるるこ二寸半正身偃卧
 し瞑目して心氣は胸膈の中に閉ざし鴻毛に
 似て鼻上につもく動さざるものこ二百息は行くと
 耳同まふく目見らまふく邪のぬくか
 則に寒暑も侵らんとま能はに蜂萬も毒する

ま能はに毒た二百六十歳是真人のをうくと
 又換内翰白く已に飢へて方に食し未だ飽に
 して先止む散步逍遥して務めて腹として空
 かくし腹の空る時に出入の息は数へよ一息より
 二端坐然然して出入の息は数へよ一息より
 かぞへて十小刻二十より数へて百に至りて百か
 敷へぬら去てふに至りては身元然として
 心寂然とるま虚空と写し形乃ごぞく

あるるくく介して一息おのほくく止む方出で候
 入らざる時此息八萬四千の毛孔の中より雲
 蒸し霧起はがぬくを始初来れ諸病自ら
 除れ諸障自然に除滅とらるるのと明證せん
 譬へば盲人の忽然として眼を穿くが如きん
 此時人に乃糸を結て路頭を指すと度か利ひは只
 おとらるるを於て省思して爾ち乃元氣を
 長養せんまは是故に之入目力か養入者

は常に瞑し耳根か養入者乃に飽きんを
 心か養入者乃不黙とすと平白く酥か用るの
 法は七つひひべしや歯が回く行者定中四大
 調和せば身心ともに勞疲とる度を覺せは
 心か起して應さふ此想か心とて一譬言へば
 色香清涼の糠糲鴨卵の大ひさの如くある
 者頂上に頭をせん其氣味微妙小くく
 遍く頭顱の乃かうばとて浸くくく

下し来く支肩及び雙臂支乳胸膈乃乃
 肺肝腸胃脊梁臟骨次第に治注し將ち
 去る此時に當て胸中の入積六聚疝癰塊痛
 ゑ不隨て降下するまき水の下に注くごとく
 歴くとして聲あり遍身が周流し雙膝と
 温渾し足心に至り尻ち止む行者再び應
 する此親なるごとく一彼の後くとして咽下
 する余の條流積のりて湛して暖め蒸はる

怡々存の良醫の種く妙香の菜物と集め是
 が焚湯して浴盤の中を盛て湛して我が臍
 輪已下を漬け蒸はるが如く此親なるごとく
 唯心所現の故に鼻根乍ら希有の香氣が
 穿て身根俄く不妙好の鞭觸が交り身心調
 適するもの二三十歳の時より遙くに勝たり此
 時不覺く積聚が消融し腸胃が調和し覺
 へば肌膚光澤が生じ若くは動めくをくむん

夜舟問答

五七

何れの病う治せざむ何れの徳うはぬさ人
 何れの仏う成せざ何れの道う成せざると功
 徳の遅速は行人の進修乃積業に依傍らく
 のと走始は卅歳の時多病にして公の患ひに
 十倍した衆醫總に顧みざ尙不到る百端の
 窮むとくも救ふ能はたの術なき世におく
 上下の神祇に祈て天仏の冥助を請ひ頼ふ
 何の幸ひぞを射しに世の軟酥乃妙術成

傳受する復ん歡喜に堪へに綿くくく糖
 修と未と期月さくくく衆病大半消除に
 爾來身心輕安する復ん覺ゆるの癡元
 く月の大小を祀せば年の潤餘を知らに在念
 以弟に輕微にして人秋の膏芳もくくく
 くるがゆし馬年今歳何十業あるのみはゆと
 知くば中に端中みく若卅の心中に瀆道と
 信者大凡二十歳在人都て知る未かくく中

乃公顧^{くわん}に^{あつら}信も黄梁^{わうりやう}守^{しゅ}熟^{じゆく}の一^{いつ}夢^むれぬ^ぬ今^{いま}
 此^こ山^{さん}中^{ちゆう}を^を人^{にん}の^の衣^えに^に向^{むか}く^く此^こ枯^こ朽^この^の一^{いつ}具^ぐ骨^{こつ}を^を放^{はな}
 て^て太^{たい}布^ふの^の單^{たん}衣^え纏^{まと}う^うに^に二^に三^{さん}片^{ぺん}を^を掛^かけ^け巖^{がん}冬^{とう}の^の寒^{さむ}
 賊^{ぞく}綿^{めん}を^を折^くくの^の夜^よと^とい^いく^くも^も枯^こ腸^{ちゆう}を^を凍^こ損^{そん}する^る
 に^にい^いく^くは^は山^{さん}粒^{りゅう}と^とを^をに^に断^きて^て穀^{こく}氣^きを^を受^うけ^けど
 り^り半^{はん}動^{どう}も^もと^とま^まる^る數^{すう}月^{げつ}に^に及^{およ}ぶ^ぶと^とい^いく^くも^も終^{しゆう}り
 凍^こ餓^がの^の覺^{かく}へ^へも^もあ^あら^らず^ず半^{はん}の^の此^こ親^{しん}の^の力^{ちから}ら^らあ^あず^ずや
 家^か今^{いま}既^いに^に公^{こう}小^{せう}苦^くる^るに^に一^{いつ}生^{せい}用^{よう}ひ^ひ盡^つさ^さる^る底^{てい}の

秘^ひ訣^{けつ}を^をい^いて^て此^こ外^{がい}文^{ぶん}に^に何^{なに}も^もな^なし^しと^と云^いて^て目^めを^を
 収^{おさ}めて^て恐^{おそ}中^{ちゆう}に^に示^しす^すも^も亦^{また}と^と流^{なが}る^る公^{こう}言^{げん}ん^んで^で禮^{らい}辭^じに^に
 徠^{らい}く^くと^とい^いて^て洞^{どう}口^{こう}を^を下^{くだ}り^りし^し六^{ろく}木^{ぼく}末^{まつ}纏^{まと}う^うに^に疎^そ陽^{やう}を^を
 掛^かく^く時^{とき}小^{せう}履^りを^を穿^すぬ^ぬて^て山^{さん}谷^{こく}を^を歩^あむ^むに^に
 わ^わる^る目^めを^を驚^{おど}ろ^ろか^かす^す目^めを^を怪^{あや}し^しんで^で畏^{おそ}れ^れど^ど回^{くわん}顧^んす^すに^に
 遙^{とほ}かに^に齒^はが^が巖^{がん}窟^{くつ}を^を蹴^おと^とく^く自^{みづか}ら^ら送^{おく}り^り来^きり^りて^て
 見^みる^る亦^{また}ち^ち向^{むか}く^く人^{にん}迹^{せき}不^ふ到^{たう}の^の山^{さん}路^ろ西^{せい}東^{とう}分^{ぶん}ち^ち難^{なん}
 一^{いつ}忍^{にん}く^くの^の場^ば客^{きやく}を^を悩^{なや}せ^せん^んを^を来^きり^りて^て解^{かい}程^{じやう}

支公周告

七

公導人^とと云て大駒^{くま}履^{かた}公着^あ多瘦^{そう}鳩杖^{きうじやう}とひこ
 嶮^{けん}巖^{がん}公縮^ふと嶮^{けん}祖^そ公陟^{のぼ}る^る来^き飄^{ひょう}くくして坦途^{たんと}
 と行くが如く終^{しん}笑^{せう}して先驅^{せんく}に山路^{さんじゆ}遙^{とほ}り
 里許^{りきよ}公下^{かくだ}て被^ひ溪水^{せきすい}の不到^{ふたふた}て存^{ぞん}ち回^{まわ}く柴^{さい}の流水^{りうすい}
 に流^{なが}ひりくば必^{かなら}じ白川^{はくせん}の邑^{むら}に到^{いた}らむと云て
 快然^{さいぜん}とくして別^{わか}れ且^{かつ}く柴^{さい}卒^{そつ}して齒^はり回^{まわ}歩^あ
 と目送^{めそう}するに老^{ちやう}歩^かの勇^{ゆう}壯^{さう}なる来^き飄^{ひょう}然^{ぜん}
 として存^{ぞん}て道^{みち}まじく羽^う化^けして登^{のぼ}る^る人^{ひと}

の如^{ごと}く且^{かつ}つ羨^{うらや}み且^{かつ}教^{かへ}に自^{みづか}恨^みむ存^{ぞん}る^る終^{しん}る^るを
 此^{こゝ}等の^ら人^{ひと}に随^ま迹^{じやく}する^る更^{さら}然^{ぜん}へざる^る来^き公^{こう}除^{じゆ}くと
 して帰^{かへ}る^る来^きて時^{とき}くに彼^かの内^{うち}親^{おや}公^{こう}瀝^{せき}修^{しゆ}する^る
 に纒^まふ^ふ二年^{にふたとし}に去^さる^る公^{こう}従^{じゆ}者^{しや}の衆^{しゆ}病^{びやう}菜^{さい}餌^{じゆ}
 を用^{もち}ひに鍼^{しん}灸^{しゆ}公^{こう}假^{かり}る^る任^{にん}運^{いん}に疎^そ遣^{せん}に特^{とく}を
 病^{びやう}を治^{ちやう}する^るの^のもふ^もあ^あら^らに從^{じゆ}者^{しや}手^て御^ご公^{こう}扶^{たす}む
 更^{さら}は^は齒^は牙^が公^{こう}下^{くだ}ま^まと来^きは^はざる^る底^{そこ}乃^{すなは}ち難^{なん}信^{しん}
 難^{なん}透^と難^{なん}解^{かい}難^{なん}入^い底^{そこ}の一^{ひと}着^{ちやく}子^こ根^{こん}に透^とる^る底^{そこ}

に徹して透りこして大執喜なる者大凡
 六七回を餘の小船悦踊舞なる者數に
 志るに妙喜の謂ゆる大快十八夜小船教に
 知るは初て知る寔に亦な欺るるものと古
 一二三箇の襪を着くといふも足を常に
 氷雪の底に浸はる如くする者今既
 巖をの目と云ふとも襪せは極せは馬
 古禱に越へるといふとも指はるるも點の小

病も悔もするた夜に彼の神術の餘動あるん
 ちの夏からと鳥林を死の殊喘多しを我
 荒唐の妄終を祀取して以て陀の上流を証感
 ことと寔宿とに靈骨者を一槌に既に成とる
 底の俊流のありふ殺るるたわらば癡鈍者
 如く骨病予に類いとする底看續して子細不
 親察せむ必に少く補ひるらん只心る別
 人のも拍して大笑せん未と何れ故を馬枯

其公咬人て午枕に喧びと

惟時

審曆丁丑孟正二十五寅

京都寺町通六角下町

小川源兵衛刊行



